産業観光
きりゅう紀行 114

産地の技をマスクに集約
世界発信見据えピンチをチャンスに

made in 桐生のマスク

新型コロナウイルスの世界的蔓延に伴いマスク不足が社会問題になるなか、織都・桐生では多くの繊維関連事業者がこの危機にいち早く対応しマスク生産に取り組んでいる。桐生商工会議所では「コロナのピンチをチャンスにプロジェクト」と銘打ち市内で作られるマスク情報をホームページ（HP）に集約。4月6日にページを公開し、現在は40社が情報を掲載している。公開当初より掲載する事業所からは「問い合わせが増えた」など好評であったが、NHKをはじめ各種メディアに採り上げられたことを機に一気に話題が全国規模に。番組放送の翌日には東北や九州などからも問合せが事務局に殺到した。

桐生には織り、編み、刺繍、縫製など、織物生産に係る各工程の職人や業者が幅広く残る全国でも貴重な集積型の総合繊維産地。今回のマスク製造にあたる事業者も各々が培ってきた専門技術を駆使する。高級服地用の複雑なジャガード織の技術が活かされたものや、抗菌・抗ウイルス加工を施したもの、着けた時に美しく見えるよう縫製が工夫されるものなど、技術の多様性がそのままオリジナルマスクに表れている。

また、5年以上前からファッション性に優れたマスクを製造するイヅハラ産業㈱（赤石重男社長）に代表されるように、ファッションアイテムとして意識された製品も多い。桐生のまちづくりやものづくりに長年携わる、構想博物館館長で多摩大学名誉教授の望月照彦氏は、「疫学的マスクはたくさんあるのに、なぜ美学的マスクがないのかと疑問をもっていたが、それらに初めて桐生の地場産業連携が答えを与えた」と桐生のマスクを評価した。

桐生市ではふるさと納税の返礼品に桐生のマスクを採用。マスクの販売を行う（公財）桐生地域地場産業振興センターでは、マスクをはじめ地場産品のネット通販サイト「織物のまち 桐生の逸品オンラインショップ」をオープンした。関係機関や団体など地域全体でマスクの存在感が高まるなか、桐生商工会議所ではマスク製造業者の連携を促進しつつ、桐生のマスクの世界発信とそれに伴う産地のブランディングに向け準備を進めている。未だ収束の目途がつかない疾疫のピンチを、「made in 桐生のマスク」で産地のチャンスに変えていくつもりだ。

●桐生商工会議所「コロナのピンチをチャンスにプロジェクト」HP／https://www.kiryucci.or.jp
●（公財）桐生地域地場産業振興センター「織物のまち 桐生の逸品オンラインショップ」HP
／https://kiryujibasan.shop-pro.jp/